

原 著

早期臍帯脱落をめざした臍処置方法の検討

鶴 巻 秀 子* 小 林 稔 子* 川 瀬 貴美子*

三ツ谷 淳 子* 佐 藤 則 子* 酒 井 三由紀*

中 村 美奈子* エングバリィー八代江* 河 内 イ ヨ*

従来、当院に於いて臍帯が脱落しないまま退院するケースが80%を占めていたことから、臍帯を早期に脱落させるために、臍処置方法の検討が必要となってきた。

そこで、他の施設での臍処置方法や文献から4つの方法を選び出し、実際に行ってみた結果、当院では70%エタノールで臍を消毒し、滅菌された輪ゴムを使用することで乾燥を促すという方法を採用することにした。

キーワード：臍帯の早期脱落、臍処置、輪ゴム、乾燥

はじめに

臍帯の切断面からの感染は、児への全身感染の原因となるばかりでなく、他児への感染につながることもある。そのため、出生直後からの感染防止が大切であり、早期に臍帯が脱落することが望ましい。

当院に於いては、正常分娩の入院期間が7日間という事もあり、臍帯が遺存したまま退院するケースが80%を占めていた。新生児の臍帯が未脱落の状態での退院することは、産褥期の母親にとって大きな不安材料の一つになっていると思われる。

そこで、臍帯脱落（以下「臍脱」とする）しないまま退院した新生児の母親に、退院後の臍脱に関するアンケート調査（表1）をした結果、

①消毒の仕方が悪くて変になるのではないかと心配だった。

②お風呂に入れる時や、おむつ換えの時に臍が引っかかったらどうしようかと思った。

等、臍処置に不安を感じていることが分かった。

このことから、退院までに臍脱を促す処置方法を検討する必要があると考え、この研究に取り組み、成果を得たので報告する。

I. 仮 説

1) フランセチンTパウダーの使用が臍脱を遅らせて

表1 臍脱に関するアンケート

1. 対象	
・未臍脱児の母親（退院後）	
・アンケート配布数 26、回収数 22	
2. アンケート結果	
①臍脱前に退院する不安の有無と理由	
・不安があった	13名
理由	消毒方法、感染が心配 4名
	おむつに引っかかる等痛そう 4名
	沐浴時の不安 2名
・不安がなかった	9名
②臍脱まで入院継続希望の有無と理由	
・入院していたかった	4名
理由	その方が安心できる 4名
・入院していかなかった	14名
理由	退院のめどが立たない 5名
	早く退院したいから 1名
	なんとなく 1名

いたのではないかと。

2) 臍輪部の乾燥を促すことで、臍脱が早まるのではないかと。

II. 対 象

当院にて、H10年5月1日～12月4日までに出生した正常新生児40名

*〒955-0055 新潟県三条市塚目字花立692番1号
三条総合病院5階病棟

表2 各施設における臍処置方法と臍脱時期

施設名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
A 臍 処 置 方 法	1. 出生時結紮法	臍帯クリップ+絹糸	臍帯クリップ+ベクタスフレー	臍帯クリップ*	臍帯クリップ*	臍帯クリップ*+ベクタスフレー	臍帯クリップ*	臍帯クリップ*	臍帯クリップ*	臍帯クリップ*+ベクタスフレー	臍帯クリップ*
	2. クリップ除去の時期	出生後12~24時間	出生後1日目	出生後24時間~2日目	出生後1日目	出生後8時間	出生後24時間	出生後1日目	出生後24時間	出生後1日目	出生後1日目
	3. 絹糸による再結紮の時期	出生後12~24時間	出生後3日目	再結紮をしない	再結紮をしない	出生後2時間	出生後24時間	出生後1日目(乾燥の悪いときのみ)	再結紮をしない	出生後1日目と3日目	出生後4日目
	4. 消毒方法	ペキサック70-90	①臍脱前...エタノール+サリチル酸亜鉛華デンブ ②臍脱後...エタノール+サリチル酸亜鉛華デンブ	エタノール	エタノール	エタノール	イソジン	エタノール	ペキサック	ペキサック	エタノール
	5. 使用するバリケータ	別サリチル酸亜鉛華デンブ	別サリチル酸亜鉛華デンブ	別サリチル酸亜鉛華デンブ	使用しない	使用しない	使用しない	別サリチル酸亜鉛華デンブ	別サリチル酸亜鉛華デンブ	使用しない	使用しない
	6. 臍帯の保護	ガーゼ	ガーゼ	ガーゼ	何もしない	何もしない	何もしない	何もしない	何もしない	何もしない	ガーゼ
B. 臍帯脱落の時期	生後4~5日頃	生後3~5日頃	生後5~6日頃	生後5~6日頃	退院後2~3日頃	生後5日頃	生後3~5日頃	生後4~5日頃	退院後(生後6日頃退院)なので判らない	退院後なので判らない	
C. おむつの種類	紙おむつ	紙おむつ	紙おむつ	布おむつ	紙おむつ	紙おむつ	紙おむつ	紙おむつ	布おむつ	布おむつ	
D. その他	4~5日で臍脱しないときは再結紮し経過観察退院する児の2/3は臍脱している				臍感染し、発熱に至る児があり、臍周囲に及ぶ感染も頻発 処置方法等検討中				1ヶ月検診時にも臍脱していないケースもあった		

III. 調査方法

1) 臍処置方法の検討

県内10病院に臍処置方法と臍脱の時期についてアンケート調査し、更に文献を調べ臍処置の方法を検討する。(表2. 参照)

2) 調査の実際

1) により得た情報を基に以下の4種類の方法で臍処置を行い、各群10人ずつの新生児で臍脱の時期を調査する。尚、臍帯保護ガーゼの有無、おむつの種類による臍脱日数の差は認められなかったため、ガーゼは使用せず、紙おむつを使用した。(表3. 参照)

1群: 70%エタノール+フランセチンTパウダー (当院の従来の方法)

2群: 70%エタノール (対照群)

3群: 70%エタノール+50%サリチル酸亜鉛華デンブ

4群: 70%エタノール+輪ゴム

(輪ゴムはニプロ輸液セットのゴム管部分を2mm

幅に切り、オートクレーブにて滅菌した物を使用する。)

IV. 結果

平均臍脱日数は1群23.1日、2群7.7日、3群4.1日、4群5.1日であった。1群で50日・89日と非常に臍脱が遅れた2人の児を除いても平均臍脱日数は9.9日だった。

当院での正常新生児の入院期間である7日以内に臍脱した児は1群2人(20%)、2群5人(50%)、3群10人(100%)、4群10人(100%)であった。

1群は、退院後1週間すぎても臍脱しない児が多く、明らかに他の方法より遅れている。3群、4群はともに2群より早く、しかも全例が7日目までに臍脱している。

これらのことから3群、4群は共に有効な方法であることが分かる。(図1. 表4. 参照)

表3 臍処置方法

	1群	2群	3群	4群
	70%エタノール+フランセチンパウダー	70%エタノールのみ	70%エタノール+サリチル酸亜鉛華デンプン	70%エタノール+輪ゴム
1 出生直後	① 臍輪部より3cmの所で臍帯クリップを止め、そこからさらに1cmを残し切断する ② 切断後、断端部を70%エタノールで消毒し、パックスをスプレーする			
2 24時間経過後の日動 (沐浴後)	① 臍輪部を糸糸で二重結紮			③ 臍輪部に輪ゴムをかける
	② 臍帯クリップ除去			① 輪ゴム除去
	③ 70%エタノール消毒			② 臍輪部を糸糸で二重結紮
	④ フランセチンパウダー-散布		④ 50%サリチル酸亜鉛華デンプン散布	③ 臍帯クリップ除去
3 翌日以降臍脱まで (沐浴後)	① 70%エタノール消毒			
	② フランセチンパウダー-散布		② 50%サリチル酸亜鉛華デンプン散布	
4 臍脱後乾燥するまで (沐浴後)	① 逆性石ケン液0.025%消毒			
	② フランセチンパウダー-散布			
※ 臍帯は断端部を常に上に向けた状態に保つ				
※ 紙おむつは臍を露出させるように折り返し、着物を着せる				

表4 臍脱日数毎の人数と平均臍脱日数

日数	2	3	4	5	6	7	8	9	10	13	14	50	80	平均
1群					1	1	2		1	2	1	1	1	23.1(白)
2群				1		4		4						7.7
3群		2	6	1	1									4.1
4群	1		3	2	1	3								5.1

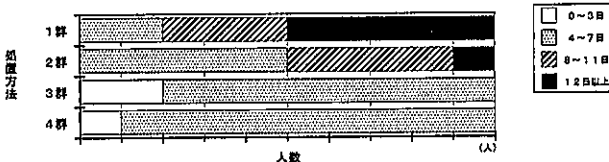


図1 処置方法別臍脱日数毎の人数

V. 考 察

仮説1) について

出生後外部から感染することが多い原因菌として主にブドウ球菌があげられる。ことに近年MRSAによる院内感染は大きな問題となっている。当院に於いても過去数例のMRSA感染による臍炎が発生している。抗菌作用があると言われているフランセチンTパウダーを使用しても臍炎が発生した例もあり、フランセ

チンTパウダーの抗菌作用は確実性がないのではないと思われる。

1群の結果より、フランセチンTパウダーが臍部の乾燥を妨げ、むしろ湿潤状態にすることで、細菌の培地になり臍脱を遅らせていたと考えられる。

仮説2) について

臍脱にかかる日数の長短は臍輪部の乾燥状態が深く関係しているといわれており、このことから乾燥作用の強い50%サリチル酸亜鉛華デンプンの使用が早期臍脱につながったと考えられる。他施設の現状を見ても50%サリチル酸亜鉛華デンプンを使用している施設は、それを使用していない施設より臍脱が早いという傾向が見られる。しかし、50%サリチル酸亜鉛華デンプンは、抗菌作用や角質軟化作用があり、分泌物を吸収し収斂作用がある為乾燥にはすぐれている一方、乾燥収斂剤は粉末が粘膜を刺激し、治癒を遅らせることもあるので、取り扱いには注意を要する。

4群では、出生直後に臍輪部にかける輪ゴムの収縮作用で、臍輪部の血管にわずかでも残っている血行を止め、臍の乾燥を促進し、早期臍脱につながった。ま

た、70%エタノールで臍を消毒し、滅菌された輪ゴムを使用する事で、感染の機会を最小限にする事ができた。更に、薬剤の使用を少なくすることで副作用の危険を回避できた。

以上のことから、4群は有効な方法であると考えられる。

VI. まとめ

私たちは、退院までに臍脱することを目標にこの研究に取り組んだ。

その結果、最も早く臍脱したのは3群、次に結果が良かったのは4群であった。しかし、3群に比べ4群は新生児に使用する薬剤が少なく、安全であるという点から、私たちは4群の方法を取り入れる事にした。

入院中に臍脱した児の母親から、「お臍が取れて良かった。お臍が取れないことだけが心配だった。」という声が聞かれたことから、この研究の動機付けとなった母親の不安を軽減できた。また、臍帯切断面からの臍炎が一例も発生していないことから、感染防止も達成できたと思われる。

今回は対象症例が少なかった為、科学的に分析ができず、はっきりとした裏付けを得るに至らなかったが、今後も早期臍脱を目標に、絹糸での結紮の時期、回数等、更に研究を進めていきたい。

本調査、アンケートにご協力いただいた皆様に深く

感謝いたします。

参考文献

- 1) 飯田ひろ美,他:臍帯の早期脱落に関する臍処置の検討. 第26回日本看護学会(母性看護)集録, P.25~27,129,1995
- 2) 藤井とし:新生児の臍処置,周産期医学,25(3) 1995
- 3) 森善樹,他:臍処置が臍脱日数に及ぼす影響. 周産期医学,20(9),1990
- 4) 小谷静,他:臍帯脱落を早める臍処置法の検討. 第27回日本看護学会(母性看護)集録,1996
- 5) 斉藤久美子:早期臍帯脱落のための臍処置について. 周産期医学21(6),1991
- 6) 雨森良彦:臍帯処置. ドクターサロン:28(11), 1984
- 7) 加城貴美子:文献からみたわが国における臍処置の変遷. 第26回日本看護学会(母性看護)集録, 1995
- 8) 棚川信夫,他:感染予防のための眼、皮膚、臍ケア. 周産期医学臨時増刊号,1987
- 9) 芳中シゲ子:分娩時の臍帯血採取法と臍処置. ペリネイタルケア,17(1),1998
- 10) 魚谷美雪:退院後の母親の臍部への心配と対処の実際. 第28回日本看護学会(母性看護)集録,1997

Original Article

Assessment of umbilicus management methods aimed at early
umbilical cord detachment

Hideko Tsurumaki*, Junko Mitsutani*, Kimiko Kawase*,
Toshiko Kobayashi*, Noriko Sato*, Miyuki Sakai*,
Minako Nakamura*, Yachie Engbarich*, and Iyo Kawauchi*

Since 80% of infants have been discharged from our hospital with their umbilicus intact, there was a need to consider methods of managing the umbilicus so that it would detach sooner.

We therefore selected 4 methods from among those used at other institutions and described in the literature, and after actually using them, we decided to adopt the method in which drying is promoted by disinfecting the umbilicus with 70% ethanol and applying a sterile rubber band.

Key words : early detachment of the umbilical cord, umbilical cord management, rubber band, drying

*Fifth Floor Ward, Sanjo General Hospital
Hanadachi692-1, Tsukanome, Sanjou, Niigata955-0055